



意識に水 を

川崎ゆきお

人の意識は簡単に変えられる。ただし、変えようとする意識があるかどうかだ。意識は幅が広い。頭で考えたこと、思っていることだけではなく、見る、聞く、嗅ぐなど、それらすべてを意識とすれば、範囲が広いのだ。気絶し、意識を回復するという場合、その意識とは、五感だろうか、記憶だろうか。また、無意識というものもあるらしい。それはあるのかないのかははっきり分からないが、本能的な意識もある。この場合、意識しなくてもやっている行動だ。

その範囲の広い意識だが、意識を変えらるとなると、これは生活習慣を意識的に変えらるとか、考え方を変えらるとか、少し上等になる。そしてここが一番大事だろう。

「どうやって意識を変えるのですか」

「だから、変えないと不都合なことが起こっているとき、変えたくなるでしょ」

「そうですねえ」

「だから、順調にいつているときは変える必要はありません。ただ、その気はなくても徐々に変わっていくものですがね」

「私は最近煮しめのように煮詰まってしまい、にっちもさっちもいきません。閉塞感のようなものに襲われます。まあ、これは攻撃してくるものではないので、自爆のようなものでしょうか」

「何かに行き詰まっておられるのですね」

「そうです。しかし、その脱出方法を考える気にもなれず、惰性でやってます。ここで何とか意識を切り替えたい。何かいい方法はないでしょうか」

「それは大層な意識ですねえ。だから、小さな意識から変えていけばよろしいが、その気はないでしょ」

「はい、そんな小さなことでは何ともならないと思います」

「それはそういう意識の中に入り込んでいるためですよ」

「脱出方法はありますか」

「服を変えなさい。上着を」

「はあ」

「それだけです」

「そんなことで、意識が変わるのですか」

「意識を変えるのは難しくても、服は変えられるでしょ」

「それは、まあ」

「難しいですか？」

「簡単ですが」

「何か気に入っている上着はありませんか」

「ありません。無頓着なもので、いつも同じのを着ています。そういうこだわりがないもので」

「着たい上着がない。靴もない」

「はい」

「じゃ、服屋や靴屋へ行ってみなさい。必ず着てみたい、履いてみたいものと遭遇します」

「そうですねえ」

「見ると分かります。触れると分かります。ああ、これは良いなあとね」

「はい」

「それを買えば気分が変わります」

「でも意識は変わらないでしょ」

「それがあなた、人間の意識なんて単純なもので、蜃気楼のようなものなのですよ。簡単なことでコロッと変わるものです。なぜなら、最初から実体がないからです。ところが服や靴は実体があります。意識に頼るより、そういった藁にすがるのがましです」

「藁ですか」

「それで一瞬気分が変わる。気に入ったものなら、気分が良くなる。これだけで十分なのですよ」

「それでは根本的な解決になりません」

「そんなことは誰にもできませんよ。だから、誤魔化し誤魔化し、やっているのですよ」

「はあ」

相談者は、それで気に入った上着と、靴を買った。多少気分は良くなり、その気分が抜けない間に仕事を始めた。煮しめのように煮詰まった案件に、水を加えたような感じになり、少しほぐれだした。その勢いのまま、前へ進むと、結構はかどり、先が見えてきた。展開が開けたのだ。

要は気分転換しただけのことだが、煮詰まれば焦げないように水を差す。ということだろう。

了